

コンテナ苗の活用と これからの課題



写真1 マルチキャビティコンテナ (JFA300; 容量300cc)

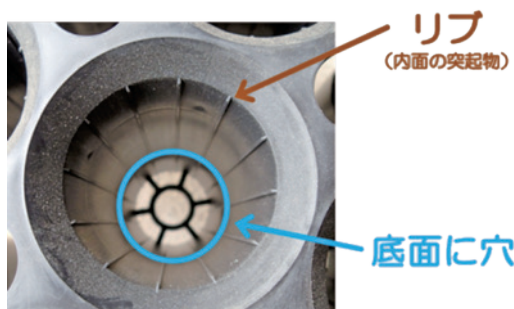


写真2 上方から見たマルチキャビティコンテナ (JFA300)



写真3 サイドスリット入りのコンテナ

九州支所 研究員 山川 博美

近年、スギやヒノキ、カラマツなどの造林において「コンテナ苗」が注目を集めています。コンテナ苗は、硬質樹脂製の多孔容器（写真1）で育成された「鉢付き苗」です。鉢付き苗には、園芸用に用いられる「ポット苗」が有名ですが、ポットの側面や底面で根が回る「根巻き」の現象が起る問題がありました。コンテナ苗では、容器の内面に「リップ」と呼ばれる突起物（写真2）や「スリット」と呼ばれる細長い切れ込み（写真3）が入っています。また、底面には穴が開いており、これを空中に浮かして育てることで、コンテナ苗では根巻きが起こらないのが大きな特徴です。培地には主にヤシ殻ピートが使われ、根が伸びて充滿することで、コルク栓状の根鉢が形成され（写真4）、そのまま植栽することができます。

一般にスギやヒノキなどの植栽では、根がむき出しになった「裸苗」が使われており（写真5）、植栽時期は春季または秋季に限定されています。一方、鉢付き苗であるコンテナ苗は、裸苗と比較して気象条件や立地環境への適応



写真5 コンテナ苗（左）と裸苗（右）



写真6 コンテナ苗の育苗



写真4 コンテナ苗の根鉢

性が高いとされ、植栽の時期や季節を拡大できるメリットがあります。しかし、コンテナ苗を使うことで日本中どこでもいつでも植栽できるかという点ではなく、環境条件によっては注意が必要な時期があるようです。

コンテナ苗のもうひとつのメリットは、植栽が容易なこと。コンテナ苗の植栽は、条件によっては裸苗の半分程度の時間で行うことができます。ただし、現状でコンテナ苗の価格は裸苗の2倍程度と高く、また根鉢があることから苗木が重く運搬にコストが掛かっています。そのため、従来の作業システムから苗木をコンテナ苗に置き換えただけでは再造林コストの大幅な削減は難しいでしょう。近年では一年を通して伐採が行われるようになっていますが、この伐採と植栽を同時に行う一貫作業システムを導入することで育林コストの大幅な削減が可能になることが分かっています。このシステムでは、植栽時期が限定されず、植栽が容易なコンテナ苗が大きな役割を果たすとともに、搬出の際に使うフォワーダなどの林業機械を苗木の運搬にも用いることで、苗木運搬の大変さも解決できます。

国内において、コンテナ苗の利用はまだ始まったばかりの新しい技術です。今後、各地の植栽事例を分析し、コンテナ苗の活用がより有効な環境条件などを明らかにしていくことが必要です。また、より良い形質の苗木の生産から植栽までの効率的なシステムを構築することが低コスト化の鍵となるでしょう。